

## くも膜下出血の兆候

季節の変わり目になると頭痛の患者さんが増える。時には医師が肝を冷やすようなこともある。

48歳のK子さん。昨晚から、ズキズキするような頭痛が続いていると言っている。もともと、頭痛持ちでない。では、「いきなり、頭が痛くなったのか?」と聞き直すが、「ウーン」と言うだけ。「冷や汗はかかなかった?」と聞いても「ウーン」である。困った。

頭痛は、患者さんの訴えを聞いただけ、8〜9割は診断がつく。だから、医師は真剣になって患者さんの答えを待つ。K子さんの場合は、初めての頭痛である。脳腫瘍や出血など、何かコワイ病気が原因ではないかと考えている。

中でも一番に疑わなければならないのは「くも膜下出血」である。発見が遅れると致命的だ。それで、動脈瘤の破裂によるくも膜下出血なら、「いきなりバットで殴られたみたいないびい頭痛がして、冷や汗をかかはず」なのである。違うのだろうか。

期待に伝えてくれないK子さんだが、気分は相当に悪そうだ。不機嫌である。普段なら、そんな患者さんに出会って、「小汚い爺さん医者で悪かったな」とひがんだりもするワッシーである。だが、K子さんは、ちよっと違う。やはり、「何かある」。

と、いやなことに勘は当たった。実は、K子さんは、話もしたくないほどしんどかったのである。で、MRI（磁気共鳴画像）やCT（コンピュータ断層撮影）で見つけたのは、動脈瘤の破裂によるくも膜下出血であった。手術も成功して、K子さんは元の生活に戻れるだろう。

痛みの感じ方や表現の仕方には個人差がある。そのせいかどうか、死亡率50%のくも膜下出血が、風邪と間違えられていたこともある。とにかく、経験したことのない頭痛が起きたら要注意だ。まずは、専門医に相談してほしい。

（石黒修三 さいしんくろクリニック・脳神

経外科専門医…10/18 北國新聞掲載）